温度感覚が要救助者への接近距離の見積もりに及ぼす効果

—火災と水難事故の2場面を用いて—

○山本佑実¹・菅村玄二²

(¹ 関西大学大学院心理学研究科・² 関西大学文学部)

キーワード: 援助行動, 温度感覚, 類似性

Thermal Sensation Influences the Motivation to Help Persons Caught in Fire and Water Accidents

Yumi YAMAMOTO¹ and Genji SUGAMURA²

(¹ Graduate School of Psychology, Kansai Univ., ² Faculty of Letters, Kansai Univ.)

Key Words: helping behavior, thermal sensation, similarity

目 的

優しい人物や行いを「あたたかい」と形容するように、物理的温かさを知覚すると、向社会的な振る舞いが促進されることが知られるようになったが (Williams & Bargh, 2008), 一方で、寒さが孤独感と他者への親和的な接触を生じさせ、向社会的行動を引き起こすという報告もある (Kolb et al., 2012)。つまり、温覚と冷覚、いずれによっても向社会的行動が生じうが、想定する原因や経路が異なるため、何を向社会的性の指標とするかによって、結果も異なると考えられる。

これに対し O'Brien & Ellsworth (2012) は、自分と対象との類似性が低い場合には、対象を自身の身体感覚に引き付けて捉えにくくなり、身体感覚から社会的判断への影響が抑制されると指摘している。自他の類似性の高さは、社会的近しさの指標であり (Liviatan et al., 2008), 援助場面ではその促進要因の1つとなる (Maner et al., 2002)。よって、自他の体感する温度感覚が類似している場合、対象の呈する情動が具体的に知覚され、苦痛や要求の認識が容易になると予測される。

本研究では、向社会的性に関して、温覚・冷覚 (孤独感)・自他の類似性の3つの変数の混在を問題点とし、条件 (温・冷) × 援助対象 (火災・水難) の2要因が提示された場合、温度刺激と類似性のいずれの効果が顕著かを検討する。もし、熱い (冷たい) 物を持った際に、火災 (水難) に見舞われた人物へ向社会的反応が取られ、反対に水難 (火災) 事故への反応が抑制されるならば、類似性の影響が温度の効果よりも強いと考えられる。また、温覚もしくは冷覚が、火災と水難事故の両方に向社会的反応を示すならば、類似性ではなく、温度操作の影響が優位である、との仮説が立てられる。

方 法

参加者 関西圏の大学生 46 名 (M=16, F=30, 平均 19.3 歳)。
手続き 実験は 2012 年 10 月下旬から 2012 年 11 月中旬 (平均外気温 16.7℃) にかけて、約 22℃の暖かい部屋と、約 19℃の寒い部屋のいずれかで行われた。参加者は、実験室に入室後、開始時の気分として、寂しさ・孤独の2項目と他のフィラー項目について、「全く=1」から、「はっきり=4」の4件法で回答した。次に、暖かい部屋に入室した者には、約 80℃の湯たんぽ、寒い部屋に入室した者には、約 1℃の氷のうがそれぞれ入ったティペアを、着座状態で膝に抱えてもらった。

その後、100mm の線分の左端に回答者、右端に事故現場で救助を求めている人物を描写したビジュアル・アナログスケールを、火災の場合と水難事故の場合の2種類提示し、どこまで要救助者に接近する意欲があるか、線分上に縦線を引いてもらった。そして、再度気分を測定した後、実際の実験意図に気づいていたかなどを確認し、実験を終了した。

結 果

温度操作や回答に不備のあった6名を除く温群 21 名と冷群 19 名を分析対象とした。まず、寂しさと孤独の2項目の合計

得点 (0 - 8 点) を、プレ測定とポスト測定でそれぞれ算出し、ポスト合計からプレ合計を引き孤独感の変化量とした。その値を群ごとに平均化し、*t* 検定を行ったところ、温群 ($M=-0.7$, $SD=2.1$) と冷群 ($M=-0.2$, $SD=1.3$) に有意な差はみられなかった。よって、孤独を感じた程度を1つの個人差要因として分析を行った。その際 40 名の平均変化量 ($M=-0.5$, $SD=1.8$) を基準に、より孤独を感じていた者を孤独増加群、緩和していた者を減少群とした。

火災と水難事故への接近距離は、0 から 100 の値で表され、値が大きいほど要救助者への距離が近くなることを意味する。その値を群ごとに平均化し、条件 (温・冷) × 孤独変化量 (増・減) の2要因分散分析で分析したところ、水難事故では、温度の主効果に有意傾向 ($F[1,36]=3.241$, $p=.080$, $\eta^2=.07$) が、孤独感変化量的主効果に有意差がみられた ($F[1,36]=4.652$, $p=.038$, $\eta^2=.11$)。つまり、冷群 ($M=71.5$, $SD=20.5$) は温群 ($M=57.9$, $SD=28.7$) よりも、また孤独感が減少した人物 ($M=74.1$, $SD=24.0$) は増加した人物 ($M=57.8$, $SD=25.3$) よりも、溺れている者へ積極的に近づくことが明らかとなった。一方、火災の場合には、要救助者に対する温群 ($M=57.4$, $SD=21.5$) と冷群 ($M=56.5$, $SD=23.4$) の接近距離に差はみられなかった。

考 察

まず、本研究から冷覚が孤独感を生起させる (Zhong & Leonardelli, 2008) という結果は再現されなかったため、冷たさを感じた人物が、冷たさを苦痛とする対象への接近意欲を高めた原因として、従来の自覚された孤独感による説明は妥当ではない可能性が指摘される。これについては、冷覚が引き起こした孤独感が、通常の質問紙レベルでは反映されない、無自覚的なレベルで接近距離に影響を及ぼすという Bargh & Shalev (2012) の結果を支持している。また、最も水難事故への接近距離が大きかったのは、孤独感減少群であったため、接近行動と孤独感緩和との関連性は示唆される。そして冷群がそれに次ぐ接近距離を示したことは、高まっていた孤独感の存在が、冷群の接近動機としてあった可能性を支持する。これらは、孤独感が媒介しないのではなく、無意識的な孤独感が背景にあると考える根拠と言えるだろう。

孤独感の効果が火災でみられなかった点については、冷群にとって熱さに苦しむ他者が類似性の低い者と知覚されたことで、火災がその接近対象とならなかったためと考えられる。よって、冷覚だけでなく、自他の類似性も接近行動の促進・抑制要因の一つであることが、本研究から示唆される。

最後に、温かさは火災と水難いずれに影響しなかったが、火災が水難事故よりも明確に危険であると判断されていたなら、危ないという抽象的認識が、熱いという具体的認識を妨げ、温群が火災に自己との類似性を見出さなかった可能性がある。抽象的思考は身体感覚の作用を減じることから (Maglio & Trope, 2012), 温覚と類似性の効果が、今回の冷群同様にみられるかについては、指標を改めて再度検証する必要がある。